

『山椒大夫』に関する臨床心理学的考察

波多江 洋 介

1. はじめに

本論文においては森鷗外（1938）による『山椒大夫』を登場人物の一人である厨子王の外傷的な体験からの回復の物語であると捉え、客体水準での理解と主体水準での理解を併用して考察を行う。客体水準での理解とは、主人公以外の登場人物を主人公にとっての實在の他者とみなす方法であるが、これに対して主体水準での理解では主人公以外の登場人物は主人公の内的な世界の一側面として理解される（Kast, 1986/1989）。したがって、もしも主人公が物語の中で魔女に出会った場合、客体水準では主人公が外的現実としての魔女に出会ったと理解される一方、主体水準では主人公が主人公自身の内的な世界において魔女的な側面に会ったと理解される。

2. 心理的な守りの弱さ

この物語の冒頭において母親と安寿と厨子王、そして、女中の4人が姉弟の父に会うために旅をしている。物語を理解する際に、最初の場面で欠けている人物に注目する必要があるとFranz（1975/1979）は指摘しているが、この場面において家族の成員の中で欠けているのは父親であり、この家族に父性的な機能が欠如していることを示唆している。実際、4人は山岡大夫という男に騙されてしまい、姉弟は母親からさらわれてしまうのだが、父性的な役割である外部の危険から家族の成員を守るという機能が欠けているのだと考えられる。また、母親に関しても知らない土地を旅し

ているにも関わらず、家族が直面している危険性を敏感に察知することができないのだが、こうした母親の在り様もまた家族の成員を守る力の不足を示している。したがって、この家族の特徴として家族の成員を守る力の弱さを指摘できるが、こうした家族のありようは主体水準では、主人公である厨子王自身の心理的な守りの弱さと理解できる。

3. 外傷的な体験による混乱

親からの分離は子どもにとっての外傷的な体験となりうるが (Martin, 1976)、母親と強制的に分離させられた厨子王が「奴頭ことばの詞が耳いに入らぬ」状態となったり、「ただ目みを睨みはって大夫を見ている」状態となったりしたことは、母親との分離が厨子王にとって外傷的な体験となり、内的な世界が大きく混乱したことを示している。また、山椒大夫を見た時に「恐ろしいよりは不思議がって、じっとその顔を見ている」と、厨子王が自らの恐怖心を理解できなくなったことから、母親との分離による混乱の大きさが推測される。さらに、厨子王は自分の名前を言えずに山椒大夫から「我わが名なを萱草わすれくさ」と名付けられるが、名前と自我同一性には密接な関係があると考えられるため、こうした状態は厨子王の外傷的な体験による自我同一性の混乱と理解できるだろう。

4. 心的外傷の攻撃性と共感性に対する影響

厨子王が連れていかれたところは山椒大夫が支配する石浦という場であるが、山椒大夫の支配する場に登場する人物の特性を考察することは、主体水準では厨子王の外傷後の心理的なありようを理解することにつながる。そして、心理的な外傷を受けるとその影響は攻撃性を適切に表現する能力や他者と親密な関係を持つ能力に現れることが指摘されているため (Herman, 1992)、ここでは「攻撃性」と親密な関係を築くための土台と

なる「共感性」という2つの視点から考えたい。まず攻撃性であるが、山椒大夫は攻撃性を有してはいるものの、そうした攻撃性は奴婢の犠牲の上に自らの土地を管理するというに用いられているため、山椒大夫の攻撃性は肯定的なものであると捉えることはできない。また、三郎の攻撃性は迫害的と言えるようなものであり、山椒大夫同様に肯定的に用いられているとは言い難い。さらに、二郎は「邸を見廻って、強い奴が弱い奴を虐げたり、諍をししたり、盗をししたりするのを取り締ま」る役割を担っており、秩序を維持するという肯定的な攻撃性がある程度持っていたと言えるが、石浦という奴婢を使役させるというシステム全体を変える力は持っておらず、こうした肯定的な攻撃性は限定的なものであったと考えられる。

一方、共感性であるが、長男である太郎は「十六歳の時、逃亡を企てて捕えられた奴に、父が手ずから烙印をするのをじっと見ていて、一言も物を言わずに、ふいと家を出て行方が知れなくなった」とのことであるから、他者に対する共感性は低くなかったと想像されるが、その太郎がこの場から出て行ってしまったことは、この場に共感的な人物が不在であることを象徴している。また、ここでも不在の人物に注意してみると、家族成員の中でこの場に不在なのは母親であり、このことは母性的な資質、つまり他者を包み養う力を持った人物の欠如を示唆している。そして、共感性とは母性的な資質の基礎となるものであるため、母親の不在もこの場の共感的な人物の欠如を示唆しているのだろう。

さてそれでは、こうした在り様は主体水準ではどのように理解できるであろうか。すでに述べたように、主体水準では登場人物は主人公の内面のある側面を表すと考える。したがって、ここでの肯定的な攻撃性や共感性を持った人物の欠如も厨子王自身の内面の特性であると捉えられ、厨子王は母親との分離という外傷的な体験を受けて他者に対する攻撃性を肯定的に用いることが困難となる一方、他者に対する共感性を失った状態である

と考えられる（図1）。

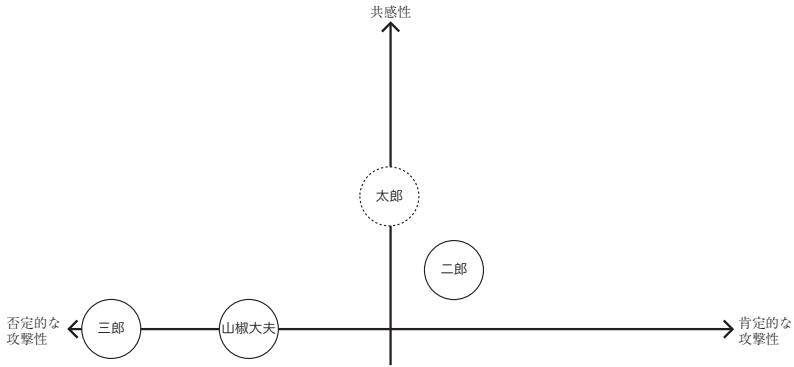


図1. 外傷的な体験の後の厨子王の攻撃性と共感性の状態
（○は不在を示す）

5. 運命を受け入れる覚悟と無意識的なエネルギーの取り込み

翌日の朝「霜が降って」おり、「ひどく寒かった」のは、姉弟の運命の厳しさを表していると思われるが、2人は「運命の下に項を^{もと うなじ かが}屈めるより外はないと、けなげにも相談」している。人は自分の運命を受け入れる時に「自分の生をほんとうに変えることができる」（Kast, 1984/1995）のであって、厳しい運命を受け入れる覚悟が、この後の厨子王の内的な変容を促したに違いない。

また、この地において安寿と厨子王が命じられた仕事は潮汲みと芝刈りであったが、芝刈りも潮汲みも自然界の素材をエネルギーとして人間が活用するための活動である。したがって、主体水準で理解するとこうした活動は人が自らの無意識的なエネルギーを取り込むことを表していると考えられ、厨子王が心的外傷から回復して内的な世界を変容させるためには、まず自らの無意識的なエネルギーの取り込みに従事する必要があるということを示している^{注1}。

6. 攻撃性・共感性の芽生えと自己治癒力の賦活

安寿と厨子王は印象的な夢を見る。そして、夢の中で姉弟は山椒大夫のところに連れて行かれ、三郎が火箸を安寿の顔に当てようとした時に、厨子王は三郎の「肘に絡み附く」という攻撃的な行動を初めて取ることになる。Jung (1916/1977) は夢を「無意識の告示者」であり、「(夢は) 驚異的な完璧さを以ってわれわれにわれわれ自身の内奥の秘密を語り告げる」と述べて夢が夢見手の無意識の表れであることを指摘しているが、意識的には自らが置かれている状況を的確に把握できていなかった厨子王も無意識的にはその危険性を認識しており、結果的に自分を守るための肯定的な攻撃性も芽生えたのだと考えられる。

その後、2人は三郎に火箸を額に当てられて傷つくものの、守本尊の「右左にぬかず」と、「額の痛みが、掻き消すように失せ」て、「創は痕もなくなった」とされている。こうした守本尊による治癒は人が本来持っている自己治癒力の高まりを表していると思えるのだが、2人にこうした変化が生じたのはなぜであろうか^{注2}。その理由としては、まず、2人が「歯をくいしばってもこらえられぬ額の痛み」を感じたことが挙げられる。つまり、2人がこの時感じた痛みは、母親と強制的に分離させられたことに対して無意識的に抱いていたものの実感として感じることはこれまで避けてきた感情であると考えられるが、Franz (1974/1981) が指摘するように、人は「内奥の地獄に入りこみえたときだけ」に「彼を助けるものが内側から現れる」のであって、安寿と厨子王の2人も自らの傷つきと痛みを実感を伴って受け入れ始めたことで自己治癒力が賦活したと考えられる。

しかしHerman (1992) が、心的外傷からの回復は「孤独な状態では決して生じない。人間関係という文脈においてのみ回復が生じる」と述べて、心理的な回復のためには対人的な交流が必要不可欠であることを指摘している通り、この物語においても2人の夢見に先立って姉弟と樵・小萩との

交流があったことの重要性は見逃せない。小説の中では樵・小萩は、姉弟を援助してくれるやや共感的な人物として描かれているために、姉弟はこの場面に至るまでに他者と深い情緒的な関係を持ったとは思われない。しかし、それにも関わらず自らの内面から宗教的な守りのイメージが出現して奇跡的ともいえる癒しが生じるところにこの物語の魅力があると思われるのだが、樵・小萩との情緒的な交流があってこそ安寿と厨子王の共感性の芽生えが生じたのであろうし、そうした変化が結果的に自己治癒力の賦活を促したのだと考えられる^{注3}。

7. 共感性の高まり

守本尊に癒された体験を通して、安寿は「顔には引き締まったような表情があって、眉の根には皺^{しわ}が寄り、目は遥^{はるか}に遠い処を見詰めている」ということになったのだが、自らの深い内面に触れて自己治癒力に気づいたことが弟を脱出させる決断を促したに違いない。その後、安寿は「弟と同じ所で為事がいたしとうございます」と申し出たところ、奴頭は安寿の申し出を受け入れる代わりに安寿の髪の毛を切ることを求める。これに対して厨子王は「胸を刺されるような」思いをする一方、意外にも「安寿の顔からは喜の色が消えなかった」のだが、安寿にとっては自分が“女性”となることよりも厨子王の逃走を助けること、つまり、厨子王の母親的な役割を取るの方が重要であったのだろう。つまり、ここでの安寿は「犠牲的な母親役」(河合, 1982)を担っていると考えられるが、個人としての自分より他者を優先する態度の背後には共感性の高まりがあったと推測される^{注4}。

8. 死と再生による回復

安寿は厨子王と別れた後、沼に入水したのだが、どうして安寿は死なね

ばならなかったのだろうか。まず、客体水準で考えると、追手につかまることに対する安寿の恐怖感が理由として挙げられる。実際、厨子王の「でもわたしがいなくなったら、あなたをひどい目に逢わせましょう」という問いかけに対して、安寿は「それは意地^{いじ}めるかも知れないがね」と三郎に迫害的な扱いをされる可能性を認めているが、三郎の性格を考えてもつかまった際に非常に厳しい取扱いを受けることは明白であり、そのような取扱いを受けることに対する恐怖感に耐えかねて自死したというのが考えられる理由の1つである。また、二郎や小萩を裏切ったことに対する罪悪感があったのかもしれない。安寿の「わたくしは弟と同じところで為事がいたしとうございます」という申し出た際に、二郎は「まあ、二人の穢^{おきな}いものが無事に冬を過ごして好かった」という声をかけており、二郎は2人にとってより共感的な存在に変化しつつあったが、そのような二郎を騙して裏切ったことに対する罪悪感、また、これまで物質的にも心理的にも援助してくれた小萩を残して弟だけを脱出させることに対する罪悪感があったとも考えられる。

一方主体水準で考えると、安寿の死は死と再生による変容を示唆しているとも考えられる。これまで見てきたように安寿の攻撃性や共感性はある程度高まっていたものの、それは個人的な能力の範囲内であり、三郎などの迫害的な勢力から守るほどの力を持っていなかった。それに対して、その後出現する曇猛律師は厨子王を追ってきた三郎に対して寺の正当性を語り、追手としての三郎を排除するほどの攻撃性を持つ一方で、厨子王と別れる際に「父母の消息はきっと知れる」と励ますなど他者に対する共感性も兼ね備えている。つまり、宗教的な力を背景とした個人のレベルを超えたより高い次元の攻撃性や共感性を体現した人物だと考えられるのだが、こうした変化を主体水準で捉えるならば、安寿の死と曇猛律師の出現は厨子王の内的世界において死と再生の変容が生じてより高い次元での攻撃性

や共感性が回復しつつあることを示している。Jung (1987/1992) は、「変容が成就するためには犠牲が払わなければならない、ということである。新しいものをかち取るために、古いものは少なくともその一部を見捨てなければならない」と述べているが、ここでも安寿の死という犠牲があつてこそ、曇猛律師で象徴されるより高い次元での攻撃性や共感性が出現し始めたといえられる^{注5}。

9. トリックスターの出現

山椒大夫の支配地を逃げ出した厨子王がたどり着いた場所が国分寺であり、ここで厨子王が出会ったのが曇猛律師と鐘楼守である。すでに論じたように曇猛律師は攻撃性と共感性の両資質を兼ね備えた人物であったが、一方で鐘楼守はどのような存在であろうか。彼は三郎が押しかけてきた際に「そのわっぱはな、わしが^{ひるごろ}午頃鐘楼から見ておると、^{ついで}築泥の外を通って南へ急いだ」と三郎を騙し、騙された三郎を見て「大声で笑った」のだが、河合(1987)がトリックスターの特徴として挙げている“いたずらもの”“策略にとんでいる”といった要素を持っていることが窺える。そして、このトリックスターの役割としてKalsched (1996/2005) は、「象徴的なかたちでは、以前に断片化されたものを全体にまとめる」や「パラドックスの両側を仲介すること」ことを指摘しているが、ここでの鐘楼守もトリックスターの「全体をまとめる」役割や「両側を仲介する」役割を果たしていると思われる。つまり、攻撃性という視点から見ると、これまで肯定的な攻撃性や否定的な攻撃性の一方の資質のみを持った人物は存在したものの、その両者を兼ね備える人物は存在しなかったのに対して、鐘楼守は国分寺の中の人物として厨子王を保護するという肯定的な攻撃性を持っている一方で、「山椒大夫に見まがうような^{おやじ}親爺」と否定的な要素も兼ね備えており、主体水準からみるとこうした両要素を統合した人物の出現は心的外傷に

よって分裂してしまった心の統合を示唆していると考えられる(図2)。

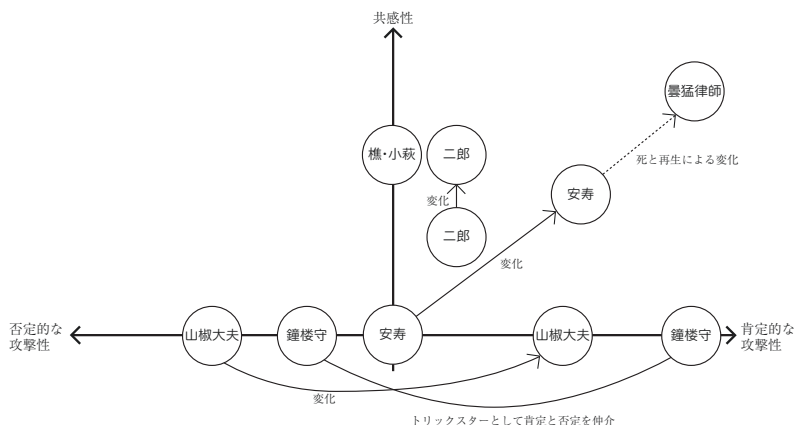


図2. 厨子王の攻撃性と共感性の変化

10. 攻撃性と共感性の回復

清水寺にて厨子王は、関白師実^まに尋ねられて、自分の歴史を語る。Kast (1986/1989) は、主人公が「もう一度誰かの前で、自分の話を披露し、それによって、もう一度自分自身に何が起こったかを明らかにすることが重要である」と意味深い体験をした者がその体験を他者に語ることの重要性を指摘しているが、ここでの厨子王も自分が体験したことを老人に語ることによって自らの体験したことを実感して自我同一性を支える物語として再編成したのであろう。実際、厨子王はその後に「元服して正道^{まさみち}」と名を変え^まるが、このことは死と再生による新しい自我同一性の獲得を示唆している。

それでは、元服した正道(厨子王)がどのように変化したのか、ここでも攻撃性と共感性の観点から考察したい。まず、攻撃性であるが、厨子王は丹後の国守となった後に、「人の売買^{うりかい}を禁じ^まて、山椒大夫も「悉く奴婢を解放」している。その結果、山椒大夫の「一族はいよいよ富み栄えた」

のだが、主体水準から理解すれば、このような変化は新しい内的な秩序を確立する力を回復したという意味で正道（厨子王）の肯定的な攻撃性の回復を示唆していると捉えられる^{注6}。

一方、正道（厨子王）は父の死を知って「身の^{やつ}襲れるほど歎いた」り、佐渡において盲目の女を見て「ひどく哀れ」に思ったりするなど他者に対する感情を切実に抱くようになる。また、盲目の女が母であると気づいた時には「^{ぞうふ}臓腑が煮え返るようになって、獣めいた叫が口から出ようとするのを、歯を食いしばってこらえた」のだが、ここには共感性の高まりに伴って生じる自らの激しい感情となんとか折り合いをつけようとする正道（厨子王）の姿勢が窺える。そして、最後の場面において、正道（厨子王）が守本尊を母の額に押し当てた結果、母の目が開いたことは印象的である。すでに、守本尊は姉弟の夢の中に出現した時と師実の養女が拜んだ時にその治癒力を発揮しているが、この場面では、正道（厨子王）が守本尊を「右の手に」「^{ささ}捧げ持って」「（母の）額に押し当てて」いる。つまり、結果的に癒しが生じたのではなく明確な目的を持って自らの治癒力を使っているが、こうした変化からは正道（厨子王）の自己治癒力のさらなる回復、あるいは、内在化が窺えるであらうし、そうした変化の背後には共感性の回復が推測されるであらう。

脚注

注1 Franz (1970/1982) は、「客観的に見れば、無意識の領域は上にも下にも存在する」と言い、上方の無意識が男性的なものと結びついているのに対して、下方の無意識は女性的なものと結びついていることを指摘している。したがって、ここで表現される山からの芝刈りは男性的な無意識からのエネルギーを得ること、潮汲みは女性的な無意識からエネルギーを得ることを示唆しており、それぞれ攻撃性と共感性の回復と関連しているのかもしれない。

注2 守本尊が母との別れの際に安寿がもらったものであることを考えると守本尊で象徴される自己治癒力は安寿の自己治癒力だと考えられるし、そうした安寿の治癒力は主体水準では厨子王の治癒力であると捉えることも可能であるが、ここでの2人は

同じ夢を見るほど自我未分化な状態となっているため、2人によって共有された無意識的な領域において自己治療力が芽生えていると捉えることが最も適切であるように思う。

注3 安寿と厨子王の傷が消えた後に守本尊の「白毫びやくこうの右左たがねに、鑿で彫ったような十字架の疵きず」が表れたことは、2人の中に他者の傷を自分の傷として引き受ける心の在り様が生じていたこと、つまり、共感性の芽生えを示唆していると思われる。

注4 こうした安寿の自己犠牲的な行動はこの物語の中では厨子王の逃走を助けて肯定的な結果をもたらしたため、図2の中では安寿の共感性を肯定的なものとして位置づけた。しかし、別の視点からはこうした自己犠牲的な行動は厨子王の過度の罪悪感を招くなどの否定的な結果につながるかもしれない、必ずしも肯定的と位置付けられないように思われる。

注5 田熊(2008)は水と「浄化力・癒し」との関連を指摘し、「水の癒しは、再生と関連している」と述べているが、安寿の死が入水によってのものであることも安寿の死が単なる死ではなく再生につながるものであることを示している。

注6 説教「さんせう太夫」では、づし王が母を救出した後に「三郎に命じて父の太夫の首を竹鋸で三日三晩引かせるという極刑をもって報いる」のに対して、森鷗外の『山椒大夫』では、山椒大夫に対する直接的な報復は行われなため、こうした結末について、岩崎(1973)は「安易に和解させてしまった協調主義」であると批判している。

主体水準からの理解においても、確かに、厨子王が山椒大夫に復讐しなかったことは、迫害的な側面を完全に消滅させていないという意味で攻撃性を十分に回復していないことの表れと解釈することも可能である。

しかし一方で、森鷗外の『山椒大夫』においては、山椒大夫はそもそもそれほど迫害的な人物として描かれていないため、山椒大夫を正道(厨子王)の攻撃的な側面を表している人物と捉えるのであれば、必ずしもそうした側面を完全に消してしまふ必要はなかったのであり、支配下に置くという方法も自らの攻撃的な側面と折り合いをつけるための一つの方法であったと捉えることも可能である。

参考文献

Franz.M.L. (1970) : The Problem of the Puer Aeternus. 松代洋一・椎名恵子訳(1982) : 永遠の少年『星の王子さま』の深層. 紀伊國屋書店.

Franz.M.L. (1974) : Shadow and Evil in Fairytales. 氏原寛訳(1981) : おとぎ話における悪. 人文書院.

Franz.M.L. (1975) : Interpretation of Fairy Tale – An Introduction to the Psychology of Fairy Tales. 氏原寛監訳(1979) : おとぎ話の心理学. 創元社.

Herman.J.L. (1992) : Trauma and recovery. Basic Books.

岩崎武雄(1973) : さんせう太夫考 中世の説教語り. 平凡社

Jung.C.G. (1916) : Über die psychologie des Unbewussten. 高橋義孝訳(1977) : 無意識の心理. 人文書院.

- Jung,C.G. (1987) : Kinderträume. 氏原寛監訳 (1992) : 子どもの夢Ⅱ. 人文書院.
- Kalsched,D. (1996) : The Inner World of Trauma, Archtypal Defenses of the Personal Spirit. 豊田園子監訳 (2005) : ト라우マの内なる世界 セルフケア防衛のはたらきと臨床. 新曜社.
- Kast,V. (1984) : Der Teufel mit den drei goldenen Haaren, Vom Vertrauen in das eigene Schicksal. 入江良平・河合節子訳 (1995) : おとぎ話にみる人間の運命. 新曜社.
- Kast,V. (1986) : Familien-konflikte im Märchen, Eine psychologische Deutung. 山中康裕監訳 (1989) : おとぎ話にみる家族の深層. 創元社.
- 河合隼雄 (1982) : 昔話と日本人の心. 岩波書店
- 河合隼雄 (1987) : 子どもの宇宙. 岩波書店
- Martin,H.P. (1976) : Factors influencing the development of the abused child. Martin. H.P. (ed.) . The abused child : A multidisciplinary approach to developmental issues and treatment. Ballinger Publishing Company.
- 森 鷗外 (1938) : 山椒大夫・高瀬舟 他四篇. 岩波書店
- 田熊友紀子 (2008) : 水イメージからみた心理療法. 日本評論社